

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (学術) Doctor of Philosophy	氏名 (Candidate Name)	高山 彩
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 大学生における多様な姿勢・動作が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授 関矢 寛史	
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授 田中 亮	
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授 上田 毅	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は大学生を対象として、身体化理論の観点から、姿勢や動作などの身体の状態が心理状態に及ぼす影響について4つの実験を通して調べたものである。論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、先行研究のレビューと問題提起を行い、本論文の研究目的を記した。先行研究では、ハイパワーポーズなど高覚醒・快感情を導く姿勢とローパワーポーズなどの低覚醒・不快感情を導く姿勢を調べたものが多いが、高覚醒・不快感情や低覚醒・快感情を導く姿勢を調べたものが少ないことを指摘した上で、高覚醒・不快や低覚醒・快な感情を導く姿勢を明らかにする必要性を述べた。また、姿勢のみでなく動作も加えて、多様な姿勢や動作が導く感情を調べることの必要性について述べた。さらにそれらの姿勢や動作が導く感情の相対的な比較に加えて、覚醒度と快適度の2軸からなる座標上のどこにそれらの姿勢や動作が導く感情が位置付けられるのかを明らかにすることの必要性について述べた。</p> <p>第2章では、座位姿勢が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を調べた実験1について記した。実験1では、29名の参加者を対象に、3日間に渡り計12種類の座位姿勢を1分間保持させた後の覚醒度と快適度について二次元気分尺度および心拍計を用いて測定した。その結果、高覚醒・快と高覚醒・不快と低覚醒・快な感情を導く姿勢を同定することができた。</p> <p>第3章では、立位姿勢が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を調べた実験2について記した。実験2では、25名の参加者を対象に、2日間に渡り計12種類の立位姿勢を1分間保持させた後の覚醒度と快適度について二次元気分尺度および心拍計を用いて測定した。その結果、低覚醒・快感情を導く姿勢を同定することができた。</p> <p>第4章では、仰臥、座位、立位姿勢および動作が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を調べた実験3について記した。実験3では、20名の参加者を対象に、2日間に渡り計12種類の姿勢や動作を1分間行わせた後の覚醒度と快適度について二次元気分尺度および心拍計を用いて測定した。その結果、高覚醒・快感情を導く動作と低覚醒・快感情を導く仰臥、座位姿勢を同定することができた。</p> <p>第5章では、座位、立位姿勢および動作が心理的覚醒度と快適度に及ぼす影響を調べた実験4について記した。20名の参加者を対象に同じ日に計8種類の姿勢や動作を1分間行わせた後の覚醒度と快適度について、二次元気分尺度では測定できない感情も反映することができるAffect Gridならびに心拍計を用いて測定した。その結果、高覚醒・快感情を導く動作と低覚醒・快感情を導く座位姿勢を同定することができた。</p> <p>第6章では、総合考察を行った。総合考察では、本研究で行った4つの実験の結果を概観し、覚醒度と快適度の組み合わせから成るそれぞれの感情を導くためには、どのような要素を含んだ姿勢や動作が効果的であるかについて考察した。また、心拍数を指標とする生理的覚醒度と質問紙を指標とする心理的覚醒度の相関の高さから、心理的覚醒度を調節するためには姿勢保持のための負担や身体運動の強度を調節することが効果的であることを述べた。</p>			

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 欧米におけるハイパワーポーズとローパワーポーズを比較する先行研究では対象外となっていた高覚醒・不快感情や低覚醒・快感情を導く姿勢や動作を同定することができた。
2. 多様な姿勢や動作が導く感情の相対的な比較に留まらず、覚醒度と快適度の2軸からなる座標上のどこにそれぞれの感情が位置付けられるかを明らかにした。
3. 多様な姿勢や動作を1分間実施することで、覚醒度と快適度の異なる多様な感情を導くことができることを明らかにした。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年2月2日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)